

大阪府福祉基金地域福祉振興助成金

(地域福祉推進助成・その他事業)

「ウィズコロナ、ポストコロナに対応した

地域活動モデルの開発」

令和4年度 事例集

		ページ
1	大阪市社会福祉協議会 令和4年度「ICTでもつながりづくりプロジェクト」	1
2	豊中市社会福祉協議会 とよなかフードサポート事業	2
3	吹田市社会福祉協議会 オンラインを活用した地域福祉活動推進事業	3
4	泉大津市社会福祉協議会 人と人をつなぐ！どこでもコミュニティ事業	4
5	高槻市社会福祉協議会 スマホでつながろう！ICT活用コミュニティ講座	5
6	守口市社会福祉協議会 災害に備えたひとり暮らし高齢者・障がい者等見守り支援事業	6
7	枚方市社会福祉協議会 地域がつながるまちづくり事業	7
8	茨木市社会福祉協議会 IBARAKI コミュニティ・カーシェアリング	8
9	八尾市社会福祉協議会 つながっちゃお YAO	9
10	松原市社会福祉協議会 コロナ禍でもおたがいさんの気持ちでつながる孤立予防事業	10~14
11	大東市社会福祉協議会 空き家等を活用した円滑的なネットワークづくり～「ribbon」運営事業～	15
12	和泉市社会福祉協議会 子どもも大人も高齢者も みんなの思いを繋ごう！ ・タブレットで新しいつながりを楽しもう！	16
	・みんなでローラー作戦！！（困った時はなんでも相談パンフレット）	17
13	箕面市社会福祉協議会 ご近所オンラインサポート事業	18
14	柏原市社会福祉協議会 新たな地域拠点整備事業 つながれオンライン Area 続「かしわLife」	19
15	門真市社会福祉協議会 地域共生型ポッチャ普及推進事業	20
16	摂津市社会福祉協議会 スマホを簡単便利に～スマートフォン講座～	21
17	四條畷市社会福祉協議会 「約束のなわて ネバーランド計画 ～輝く未来は私たちの手に・・・～」 ・ほっこりマフづくりプロジェクト	22
	・「注文を間違える陽だまりオープンカフェ」（「つながり」「支え合い」「生きがい」事業）	23
	・「なわてこども未来新聞」～身近な福祉を学ぼう～	24
	・オンライン会議・集いのための ICT 機器貸出・活用事業	25
	・やる気スイッチ事業	26
	・「足力 up! 歩行手帳」の作製と配布、アプリを活用したイベントの開催（介護予防、閉じこもり予防、体力向上、生きがいづくり事業）	27
18	大阪狭山市社会福祉協議会 ICT化による新たな地域のつながりづくり	28
19	阪南市社会福祉協議会 「ツナガリ・ツナゲル・ツナギ合う」農福・漁福連携プロジェクト	29
20	島本町社会福祉協議会 ICTでつながる地域づくり	30
21	能勢町社会福祉協議会 外出自粛に伴い要支援者安否確認、居場所確保、新型コロナウイルス感染者、濃厚接触者買い物支援事業 ・安否確認（訪問活動）	31
	・居場所確保	32
22	太子町社会福祉協議会 つながりたいし事業	33

※各市町村社会福祉協議会で作成いただいた内容を取りまとめました。

令和4年度「ICTでもつながりづくりプロジェクト」

社会福祉協議会名：大阪市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：大阪市・区社協職員

参加（延べ）人数：83人

実施回数：学習会1回、プロジェクトチーム会議4回

内容：

- ・市・区社協の全部署を対象としたICT学習会を開催した。
- ・ICT活用が比較的進んでいる区社協からプロジェクトメンバーを選出し、プロジェクトメンバーが中心となって「地域福祉活動におけるICT活用のポイント集」を作成した。また、動画「社協職員のとある一日」及び「社協職員のとある一日を撮影編集してみたら」を作成し、使用した様式や資料も含めて各区社協に共有した。
- ・市内24区全体の発信力を高めるために、取組み発信サイト「ふくしる大阪」を作成し、情報発信を強化した。

効果：

- ・市・区社協職員に向けてICT学習会を開催したことにより、ICTに苦手意識を持つ職員も、ICTを活用した取組みの企画・実行力が高まった。また、ICTやすすすをツールのひとつとし、地域福祉活動やボランティア活動に活用することを提案できるようになった。
- ・特に、SNSや動画を活用した発信が増えたことで、これまで紙媒体での発信でつながっていた層にとどまらず、若い世代を中心に新たな層とつながることができた。



●工夫したこと・力を入れたこと

- ・各区の社協活動や地域福祉活動でのICT活用を考えるヒントになるよう、事例をもとにして「地域福祉活動におけるICT活用のポイント集」を作成した。
- ・動画制作については、「知識や技術が不足している」「何から始めればいいのか分からず、取り組みにくい」などの意見をふまえ、制作へのハードルを下げるために、区社協職員（プロジェクトメンバー）自らが企画・撮影・編集した動画「社協職員のとある一日」を制作し、その制作場面を通じて、作業手順や制作時のポイントを伝える動画「社協職員のとある一日を撮影編集してみたら」を作成した。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・各区社協でICTを取り入れた取組みの実施や、SNSの活用が進んだことにより、シニア世代がボランティアとして担い手となったり、若年層や子育て世代などこれまで社協と関わりの薄かった世代との新たなつながりができた。
- ・区社協職員等から「このプロジェクトをきっかけに、動画やSNSの活用について意見交換する機会が生まれた」「ICT活用をコロナ禍だけのものではなく、アフターコロナでも、魅力的なツールとして活用し続けたい」との声があった。



とよなかフードサポート事業

社会福祉協議会名：豊中市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：特例貸付利用世帯、外国籍の方等

参加（延べ）人数：180人

実施回数：宅食サービス延べ60回、くるくるパントリー12回、イベント交流会延べ5回、食材配布適宜

内容：コミュニティソーシャルワーカーや特例貸付等の相談を通じて把握した家事面での不安や課題がある世帯に対し、フードドライブでいただいた食材や社会福祉施設で用意いただいた手作り弁当を訪問にて届ける。その訪問を通じて得られたニーズに対し、学習支援や地域活動等といった居場所と活躍の場を提供していく。外国にルーツのある方々については食材配布だけでなく交流会を通じて地域の方々とつながる機会を設ける。

効果：活動の状況を各種会合の場や SNS 等により発信することで、人的物的な協力を多くいただくことができた。相談の入り口に食材の提供を組み入れることで、利用者の切迫した状況の中で、介入がしやすい場面が多くみられた。

●工夫したこと・力を入れたこと

- ・課題を抱える家庭に訪問する際に、寄付等でいただいた食品食材を、フードロスの取り組みとしてお渡しすることで、「喜ばれるアウトリーチ」の仕組みを構築した。
- ・個人情報の取扱いには細心の注意をはらうよう、支援にたずさわる方々に徹底した。
- ・食材支援はフードロスの取り組みとして行うことで、受け取る利用者の負担感の軽減に努めた。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・食材支援は大変喜ばれた。
- ・同じ地域に外国にルーツのある方が住んでいたことがわかった。
- ・こども食堂の食事メニューにフードドライブの食材を多く活用できた。



大阪府福祉基金地域福祉振興助成金 「ウィズコロナ、ポストコロナに対応した地域活動モデルの開発

オンラインを活用した地域福祉活動推進事業

社会福祉協議会名：社会福祉法人 吹田市社会福祉協議会

●事業実績

対象者：市内在住の高齢者、地区福祉委員会
実施地区数：33 地区中 12 地区 + 大阪信用金庫
延べ実施回数：19 回

延べ参加高齢者数：171 人

延べ協力者数：180 人

主な協力者：地区福祉委員会、地域包括支援センター、福祉施設（高齢・障がい）、生協、学生 等

内容：高齢者が電子情報をキャッチできるようなきっかけづくり、そして、若者が地域で輝ける場づくりを目的として、オンライン講座の開催を推進することができた。また、講座をきっかけに地区福祉委員会や専門職など、多様な団体が高齢者の生活課題や生活支援について、意見交換・協議する場を充実させることができた。



●工夫していること・力を入れていること

既存のネットワークに加え、新たな団体を巻き込むことを意識しながら、ネットワークの構築、強化をすることをねらいとした。また、学生ボランティアの協力にも力を入れて取り組むことができた。

●今後に向けて

今回の講座をきっかけに、より充実したスマホ講座の実施や、地域検討会の場を広げていく。また、多様な人が参画できるような企画、協議する場を展開していきたい。



人と人をつなぐ！どこでもコミュニティ事業

社会福祉協議会名：泉大津市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：地域住民全て（コロナ禍でつながりにくくなった子どもから高齢者、障がい者等）

参加（延べ）人数：303名

実施回数：8回程度

内容：

- ・FM ラジオ（コミュニティFM局「FM いずみおおつ」）を活用した細やかな地域情報発信、防犯啓発等
- ・移動型の機動力を活かした集いの場づくりとして各地区の課題解決のためにサロンや学習・交流等の広場の実施
- ・オンラインを活用して情報発信や情報提供を行う。
- ・多職種と連携して、気軽に困りごとを相談できる機会を持っていただく。
- ・屋外で身体を動かす機会を持って頂く。（新しい事を始めるきっかけの場として活用して頂く。）
- ・昨年度に引き続き、事業終了後も自分達で継続できるような働きかけも行う。

効果：

- ・コロナ禍で外出や他者との交流の機会が減少していた方も、屋外で気軽に活動を始める事ができ、参加をきっかけに自分達でもできる事から取り組んでいくように気持ちに変化が生まれた。

●工夫したこと・力を入れたこと

- ・地域の様々な団体や専門職と連携し、一つ一つの事業を企画し実施した。
- ・昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大傾向の中でも、屋外で活動する事の強みを活かして、「短時間でも、誰でも、気軽に参加できる」という働きかけの声掛けをしながら実施した。
- ・参加される地域の方の主体性を引き出せるように、企画段階から一緒に考え、負担なく住民主体で継続的に取り組めるようなしくみを検討した。
- ・昨年度、実施した際、気軽に持ち運びできる机や椅子を貸出しして欲しいという声が多く挙がった為、今年度はキャンプ用の椅子と机を購入し、少人数でも気軽に実施して頂けるように工夫した。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・公園でボランティアによる紙芝居実演時に参加していた子どもを見た参加者から、「可愛いなあ」「見てたら元気もらえるなあ」という声があがった。
- ・昨年度、本事業に参加した事をきっかけに自分でもウォーキングを実施するようになった。きっかけがあれば、自分でも続けれる事が分かった。
- ・認知症オープンカフェでキッチンカーや演奏などがあつた。時々こういったイベントがあると嬉しい。又何かあれば参加したい 等、前向きな意見が多数聞かれた。



【活動の様子（ウォーキング）



オープンカフェ



紙芝居後のバルンアート】
ページ 4



【福祉委員さんとイメージキャラクター】
大阪府福祉基金地域福祉振興助成金



【チラシ】



「ウィズコロナ、ポストコロナに対応した地域活動モデルの開発

スマホでつながろう！ICT活用コミュニティ講座

社会福祉協議会名：高槻市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：市内に住む高齢者

参加（延べ）人数：35人

実施回数：20回（5回×4クール=20回）

内容：スマートフォン（以下スマホ）を活用した地域のつながりづくりの推進に興味がある方に対し、学識経験者や市内の大学に在籍する学生ボランティアが中心となり、スマホの使い方や他者とのつながり方について実践講座を開催。1・2クール目はマンションの住民や地区福祉委員会を対象に講座を開催。3・4クール目に関しては、市内全域の高齢者に対象を拡大し、講座を開催。

効果：

- ①事業を通してコロナ禍でもスマホ等を活用し、住民同士のつながりが生まれた。
- ②実践を繰り返すことで、参加者のスマホ機能を活用するスキルがアップした。
- ③スキルを活かし、ボランティア活動や学びを他者に伝えたいという意欲の向上につながった。

●工夫したこと・カを入れたこと

- ・NPO法人学習創造フォーラム FiLC（令和3年度の協力団体）と講座を進める中で、講座前後に打ち合わせをする時間を設け、受講生の状況を共有し、内容を検討するようにした。
- ・市内で開催中のスマホ講座でボランティア活動をするを想定し、講座で学んだことを他者に教える練習の時間を設けた。
- ・少人数での対応が出来るよう、グループ分けを行った。参加者同士交流が出来るよう、グループも固定にならないような工夫も行った。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・知らなかったことが知れた。
- ・参加者同士で学んだことを教え合えるようになった。
- ・学生と交流することが出来て良かった。
- ・慣れるまで時間がかかるが、何度も挑戦して自分のものにしたい。
- ・教えてくれた方がとても優しく親切で楽しく学ぶことが出来た。
- ・5回の勉強会が楽しく終わった。



災害に備えたひとり暮らし高齢者・障がい者等見守り支援事業

社会福祉協議会名：守口市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：地域で把握している災害時等に支援が必要とされる市内在住の高齢者及び障がい者（避難行動要支援者など）

配付数：8,500 セット

内容：市内在住の高齢者や障がい者等が、ウイズコロナ、ポストコロナの時代においても地域で孤立しないよう、地区福祉委員を中心に見守り支援を行いました。

災害時に無事を知らせる「安否確認用タオル」や「防災グッズ」を地区福祉委員が高齢者や障がい者宅に訪問し配付しました。

効果：地域の福祉委員と高齢者や障がい者が普段から顔見知りになり、その方々が福祉委員に相談も出来るような関係づくりを行うとともに、その体制を強化することができました。

●工夫したこと・力を入れたこと

昨年度より対象者の範囲を広げたことで、より多くの方に「安否確認タオル」を配付することができた。

また、新たに「防災グッズ」（救急キット）を配付し、見守り体制の強化と地域住民の防災意識の向上につながった。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・実際の災害時に生かせるように普段から見守りを行っていきたい
- ・見守り体制をより強化できた
- ・他団体（老人会等）からも問い合わせがあった



地域がつながるまちづくり事業

社会福祉協議会名：枚方市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：市民

参加（延べ）人数：1566人

実施回数：社協にここご新聞発行（年2回）スマカフェ（年4回）

内容：社協にここご新聞は昨年度に引き続き、校区福祉委員会の協力を得て、地域住民への配布を行った。参加型の応募企画を取り入れ、紙面を通じて、地域住民とのコミュニケーションを実施。

スマカフェでは、スマホの相談会として、スマホなどのICTツールを利用したことない方や上手く利用できない方を対象とした相談会を開催した。パソコンやタブレットなどを準備し、まずは触れてもらうことで、スマホへの苦手意識の解消も目的として開催。

効果：まだまだサロンへの参加ができない地域住民も多く、社協ニコニコ新聞を通じて、声掛けやつながりの継続ができた。

スマカフェでは、社協の拠点に来てもらうことで、他の活動とのつながりもできた。中高年の参加者の中には、パソコンを触ったことがない方の参加もあり、少しずつ触れてもらうことで、苦手意識の解消等にもつながっている。また、一定数の参加者の参加が継続していることから、地域住民のニーズ把握にもつながった。



●工夫したこと・力を入れたこと

社協ニコニコ新聞で、昨年度は自宅にいても楽しめることを中心に実施したが、今年はウィズコロナも意識し、社協拠点での取りくみの紹介や電車旅など紹介も行い、外に出るきっかけづくりを行った。

また、スマカフェでは地域交流スペースとしての開放も意識し、スマカフェに来てもらうことで、社協の拠点を知ってもらったり、他の活動への参加へつながるよう声掛けなどを実施した。

スマカフェも積極的に社協のHPやYouTubeの啓発活動も行った。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

【社協ニコニコ新聞】

活用することで訪問のきっかけになった。来年度も継続してほしい。新聞を見て、CSWのことを知り、相談しようと思った

【スマカフェ】

子どもに聞けないことも相談することができた。

パソコンに触れてみたくて参加したが、まだなにをしていいかわからない。次回は妹も一緒に参加したい。

社協の拠点がここにあることを知らなかった。

IBARAKI コミュニティ・カーシェアリング

社会福祉協議会名：茨木市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

（全体）

- 4、8、11月：全戸配布本会広報誌記事にて事業PR
- 5月：地区福祉委員長連絡協議会で参画地区による事業報告
- 5月：企画会議の実施
- 12月：参画会議（中間報告会）

2月：全戸配布社協会員募集チラシにて事業PR

（地区福祉委員会）

【玉櫛地区、太田地区】

時期：5月～11月（計6回実施） 参加人数：176名（スタッフ等除く）

対象：近隣住民どなたでも 内容：移動式出前サロン

【豊川地区】

時期：4月～3月（計64回） 参加人数：261名（スタッフ等除く）

対象：豊川地区にお住まいの方 内容：お買い物支援

【穂積地区、沢池地区、石河地区、見山地区】

時期：4月～3月（計） 参加人数：82名（スタッフ等除く）

内容：通院や散髪や福祉委員会活動場所までの移動支援

対象：各地域にお住まいの方、福祉委員会活動へ参加希望の方

●工夫したこと・力を入れたこと

昨年度、車輛を地区福祉委員会で共有し、オリジナリティ溢れる活動を展開できる仕組みを構築できました。

この仕組みを活用し、買い物支援や移動支援、出前サロンなど各地域の実情や課題に合わせた活動を展開することで、新たなドライバーや運営スタッフなど地域活動の担い手の発掘に成功。さらに、買い物支援では大型商業施設が、地域活動に目を向け積極的に協力、専用駐車場を確保し、案内表示を設置してくれるようになるなど、地域住民の活動が呼び水となり、地域ごとでネットワークを発展させることができました。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・以前から福祉委員会には入っていたが、こんなに事業に深く関るの初めて。送迎する際に「ありがとう」と言ってもらえることがとても嬉しいです。
- ・お買い物に行くのも楽しいけど、車内でお友達とお話するのをいつも楽しみにしています
- ・新しい取り組みをすることで地域活動を見直すきっかけになりました。



つな が っ ち ゃ お YAO

社会福祉協議会名：八尾市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：(A) 高齢者、(B) 乳児を育てている親

参加（延べ）人数：289人

実施回数：(A) 11回、(B) 3回

内容：対象者それぞれに合わせた孤立感の解消、つながり作りの後押し。

(A) 高齢者への外出促進・孤立感解消事業

地域の集会所などに少人数で集まり、体操などの動画を高齢者だけでも簡単に視聴することで、孤立感の解消に努めた。

(B) 子育て中の親同士の繋がり作り事業

生後4～10か月ごろの子を持つ親を対象とする簡易なサロンを開催し、孤立感の解消と親同士の繋がりづくりを促した。

効果：

(A) 簡単に集まれる機会を提供したことで、参加者である高齢者の外出意欲が高まり、活動を休止していたボランティアのボランティア継続の意欲が向上した。

(B) 地域の担い手がサロンの運営方法を体験したことで、今後の地域住民主体の子育てサロン活動再開につながった。

●工夫したこと・力を入れたこと

(A) 高齢者だけでも簡単に機器が使えることを理解してもらうために、地区福祉委員長など担い手の代表者に向けて、機器操作のデモを行い、事前に地域が必要としているコンテンツの内容についてもヒアリングを行うことで、より多くの地域で活用してもらえるように努めた。

(B) 集合型の子育てサロンでは、参加者をご近所さんグループに分けて情報共有や子育ての悩みを共有する場を設け、できるだけママさん同士の“近くのつながり”を増やせるように進行した。またその後の交流が続くよう、近くの子育て交流の場所を案内し、必要に応じた制度やサービスも紹介した。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・定期的に出かける機会をもらえて、楽しみが増えました。(高齢者さん)
- ・サロンの企画に悩むことがなくなり、助かっています。(サロン運営ボランティアさん)
- ・近くの子育て支援の場にも参加してみようと思いました。(ママさん)



コロナ禍でもおたがいさんの気持ちでつながる孤立予防事業

社会福祉協議会名：松原市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度） 少人数かつ短時間で実施する「脳トレ」と「体操」の教室

対象者：高齢者等 974 名

参加（延べ）人数：5,385 名

実施回数：毎月 29 か所（令和 5 年 3 月 31 日現在）

内容：コロナ禍の中、三密を避けた取り組みとして、福祉委員会・社会福祉法人、介護保険事業所・薬局・学習塾・アロマサロン・お寺・神社などに、教室の窓口を依頼し、おたがいさんパスポートを持った高齢者が教室の窓口に、脳トレの問題を取りに来て、家等で脳トレの問題を行って、認知症の予防をしていただいています。

効果：コロナ禍の中閉じこもりがちになっていた高齢者の行き場として、予想以上に多くの方が登録をして、教室に通っています。コロナ禍で外出する機会が減ったことと、認知症の予防に関心があるという利用者のニーズを満たし、十分な成果があったと思います。

●工夫したこと・力を入れたこと

薬局や神社など、高齢者が訪問をしやすい場所にも脳トレの問題の配布場所として、協力してもらえたので、高齢者にとっても、参加がしやすかったと思います。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

「外出の機会ができて、当日を楽しみにしています。」「会場で友達に会えてうれしい。」「閉じこもりがちな友達を誘って、会場まで運動を兼ねて来ています。」など、みなさんから本当に喜んでいただいています。



コロナ禍でもおたがいさんの気持ちでつながる孤立予防事業

社会福祉協議会名：松原市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

高齢者に対して、ICTを使ってつながる初心者向け「スマホ」教室・LINEアプリ教室・スマホサポーター養成講座

対象者：ICTツールを使ってみたい高齢者

参加（延べ）人数：63名

実施回数：初心者向け「スマホ」教室（年1回）・LINEアプリ教室（年2回）スマホサポーター養成講座（3回連続講座）を実施。

内容：高齢者等が、コロナにより対面で会えなくても人とつながっているように、携帯販売会社に依頼をして、初心者向け「スマホ」教室・LINEアプリ教室を実施しました。その教室の受講者から、スマホの操作で疑問に思うことを個別に聞きたいというニーズがわかり、スマホの操作を個別に教えてくれるスマホサポーター養成講座を実施しました。

効果：コロナ禍で対面が制限される中で、スマホを使って、非対面でのコミュニケーションを取る方法についての教室を開催できたことは、高齢者がICTツールを使うきっかけとなりました。

さらに、教室を開催する中でスマホに慣れていない方は、スマホの操作で疑問に思うことを個別に聞きたいというニーズがわかり、NPO法人に講師を依頼し、大学生にアシスタントとして協力してもらい、スマホサポーター養成講座を実施しました。スマホサポーターには、ボランティアとして、スマホの疑問箇所を教えてもらう体制を構築しました。

●工夫したこと・力を入れたこと

高齢者にとって、スマホ全般の使い方を学ぶことはもちろん、疑問に思う点をピンポイントで教えてもらうニーズがあることがわかったので、そういった疑問点を教えてくれるボランティアを養成し、今後も高齢者がスマホなどの疑問点をサポーターに聞いたりして解消し、ICTツールを継続して使うことができるようになったと思います。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

「なんとなくわかっていたことが、はっきりわかってよかった」「自分たちでも、周りの人がスマホで困っているから、わかる範囲で教えてあげたい。」など、スマホサポーターからも前向きな意見を寄せていただきました。



コロナ禍でもおたがいさんの気持ちでつながる孤立予防事業

社会福祉協議会名：松原市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度） 地域の花壇や名所をみんなで発見！オーダーメイドの ウォーキングコースの作成

対象者：介護予防・認知症予防に関心のある高齢者

参加（延べ）人数：写真撮影ボランティア（12名）、認知症予防学習会（25名）、脳トレポイントラリー23名

実施回数：写真撮影ボランティア養成講座（年2回）認知症予防学習会25名（年1回）、脳トレポイントラリー23名（1か月間）

内容：地域に咲く花や名所を撮影して紹介をする写真撮影ボランティアを養成し、撮影した写真をweb上にあげて、高齢者がウォーキングをする際の目的地の参考にしてもらおうと思って、事業を実施しました。

今年度は、コロナ禍でも、閉じこもらずにウォーキングや脳トレを行うことが認知症予防につながるという内容の認知症予防教室を開催し、スマホでweb上のマップを見て、オーダーメイドのウォーキングコースを作るということを進めるために、脳トレと組み合わせ、コロナに負けない脳トレポイントラリーとして、ウォーキングをする機会を提供しました。

効果：写真撮影ボランティアの方は、随時市内で撮影した花の写真などを送ってもらうことで、気軽にできるボランティアとして活動してもらっています。ポイントラリーの参加者からは、知らない場所に行くことで、脳が活性化し、良い運動になったとの声が聞かれ、閉じこもりの予防に効果がありました。

●工夫したこと・力を入れたこと

ボランティアを身近な活動としてもらうために、自身の持っているスマートフォンでできるボランティアとして、活動に協力をしてもらいました。

脳トレポイントラリーは、できるだけスマートフォンを活用していただけるように、QRコードでポイントラリーの地図がみられるようにしたり、webで地図を確認してもらうことで、スマートフォンの便利さを実感していただけるように工夫をしました。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

ポイントラリー参加者から、「知らない町に行き、知らない方との出会いあり、いい運動になりました。」「万歩計の歩数アップしました。」など、閉じこもり予防につながったとの感想を聞きました。



コロナ禍でもおたがいさんの気持ちでつながる孤立予防事業

社会福祉協議会名：松原市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

Zoomを使ったオンラインのおしゃべりサロン

対象者：おしゃべりサロン 45名、棒体操教室 85名、チューブ体操 37名
参加（延べ）人数：おしゃべりサロン 498名、棒体操教室 740名、チューブ体操 37名

実施回数：おしゃべりサロン年 11回、棒体操教室・チューブ体操年 12回
内容：コロナ禍でも、オンライン上で多くの人が集い、集まれる場として「一般社団法人と協働で ZOOM を活用したおしゃべりサロン」「大阪公立大学と協働で棒体操教室・チューブ体操教室」を、おおむね毎月開催しました。

効果：コロナ禍で外出が困難な時でも、オンラインで開催をすることで近くの会館に少人数で集まったり、個人宅からも参加でき、三密を避けつつ、多くの方が参加できるなど、効率的な取り組みとなりました。

●工夫したこと・力を入れたこと

コロナ禍で、集うことができない中、オンラインという環境で集まり環境を提供し続けたことは、対面での接触がしにくい中でも、人と人とのつながりを切らすことのない取り組みになったと思います。

また、オンラインで参加できる取り組みということで、移動の制限がなく、参加者の負担も少なく、気軽に参加できる取り組みになりました。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

「オンラインの行事ということで、会場への移動という制限がなく、気軽に参加できた」「ZOOMで会場同士をつなぐことで、多くの方とつながっている感覚になり、うれしくなった」との声が寄せられました。



コロナ禍でもおたがいさんの気持ちでつながる孤立予防事業

社会福祉協議会名：松原市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

独居高齢者などに自宅で花などの植物を植えたり育てたりしてもらい、その成長過程を通じポスティングをしながらの安否確認

対象者：見守り等が必要な高齢者、**80歳以上**の高齢者

参加（延べ）人数：**120名**

実施回数：随時訪問を実施

内容：高齢者の玄関先に植物を置いていただき、高齢者の方が植物の世話をし、その成長過程を、ポスティングをした際に確認をしていくことで、対面をしなくても見守りにつながるといった目的で実施。

効果：非対面でできる見守りということで、見守りを行う側も、感染のリスクを低く抑えることができた。

さらに、高齢者の方が植物の世話をする習慣ができ、高齢者自身の高齢者の生きがいづくりにつながるような企画になりました。

また、植物を育てて花が咲いたり、実がなることで、そこに住む近所の方の癒しにもつながりました。

●工夫したこと・力を入れたこと

コロナ禍の中、対面がはばかれる中、見まもる側・見まもられる側ともに、非対面で見守りができるので、感染を予防した見守りとなりました。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

「植物の世話をするのが楽しかった」「街中の植物の様子も見て、心が和んだ」という声が寄せられ、見守る側・見守られる側だけではなく、地域住民のみなさんの癒しにも寄与したと思います。



空き家等を活用した円滑的なネットワークづくり～「RiBBoN」運営事業～

社会福祉協議会名：大東市社会福祉協議会

●事業の概要

対象者：福祉委員、地域住民、ボランティア等

参加人数：86人

内容：空き家を拠点に「多様な人々が集まれる『場』の構築」「多様な人々を集める『機能』の構築」「多様な人々をつなげる『仕組み』の構築」を図ります。3つの事業を円環的につなぎネットワークづくりを行います。

1. 情報発信・収集に関する事業

- ・IT教室の開催（LINEの活用方法等）
- ・LINEを利用し、情報発信・収集する高齢者等を増やす
- ・高齢者等が新たな拠点とLINEでつながることを促進

2. ボランティア養成に関する事業

- ・情報発信や憩いの場運営に関わるボランティアの養成（IT講習受講対象者等）

3. 資源循環システムの構築を通じた、支え合い活動に関する事業

- ・住民や企業の協力による資源循環システムの構築と支え合い活動の仕組みを研究し実践する
(食料や生活用品の寄付を募り、困窮者や必要とする住民に渡す)

●工夫していること・力を入れていること

- ・「多様な人々が集まれる場の構築」を図るため、大阪産業大学デザイン学科デザイン学科の川口ゼミとの協働
- ・本事業の運営にあたり、Instagramを開設。情報発信・収集の場の構築を図っている

●課題に感じていること

- ・ボランティアの確保・多様な人々が集まれる場づくりには資金が必要となる（様々な世代を呼び込むには、外装や内装、庭づくりに工夫が必要のため）

●R3年度から発展させた内容

- ・IT教室の対象者を広げ、住民が孤立しない仕組みづくりを進めるほか、新たな担い手の確保を図る取り組みを実施する。また、活動内容などに制限がない新たな拠点を確保することで、新しいコンテンツ（中身）を開発・提供し、多様な人・方法による「つながり」をつくる事業を模索し実施する（住民や企業の協力による資源循環システムの構築の研究・実践）



「タブレットで新しいつながりを楽しもう！」

社会福祉協議会名：和泉市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：対象校区のいきいきサロン参加の高齢者やボランティア、民生委員児童委員、関係機関（地域包括支援センター・いきいきネット相談支援センター）等

参加（延べ）人数：65人

実施回数：2回（2校区）

内容：対面で集う機会は徐々に増えてきたが、完全には以前の状態に戻っていないため、市社協からの貸出用のタブレットとwifiを活用し、ICTを使用した活動に少しでも親しみを持つための支援を行った。高齢者を中心とした住民が、地域で交流する機会を増やせるよう、オンラインでのつながり作りや安否確認、ゲーム、講座開催等の企画を地域や関係機関と協働して行ってきた。

効果：ICTに抵抗感を持つことが多い高齢者が、ICTを使用した活動を皆で楽しく行うことで、新しい取り組みに挑戦することの喜びや可能性を体験してもらうことが出来た。対面の機会が減っていても安否確認が出来たり、ゲームを通じて脳の活性化を図ることにもつながり、遠方にいる講師から消費者被害の啓発について学ぶことが出来た。

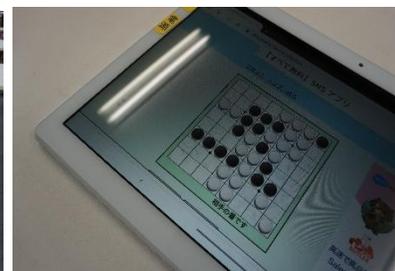
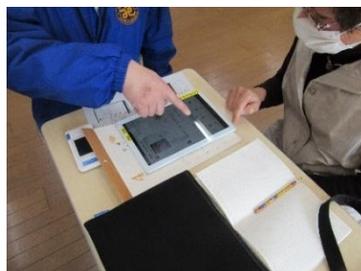
●工夫したこと・カを入れたこと

先入感から、ICTに抵抗を持たないように、出来るだけ分かりやすく、ゆっくりと説明を行い、複数の専門職による丁寧なサポートを心掛けた。

安否確認の取り組みやゲームについては、地域のボランティアから実施希望の意向があったため、準備や内容については、出来るだけ地域住民が主体となるように関係機関と共に後方支援を行った。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・一人では、なかなかチャレンジできないけれど、皆と一緒に使い方を学ぶことで、ICTにも触れることが出来た。楽しかった。
- ・対面の機会が減るなかで、地域がつながるきっかけが出来て、良かった。
- ・遠方にいる専門の講師から、消費者被害の様々なケースについて、話を聞くことが出来た。オンラインでの講義が新鮮だった。



「みんなでローラー作戦！！（困った時はなんでも相談パンフレット）」

社会福祉協議会名：和泉市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：対象地域の全住民

参加（延べ）人数：105人

実施回数：3回（3校区）

内容：コロナ禍での生活のしづらさが、徐々に緩和しているものの、地域コミュニティの減少や生活困窮、疾病の悪化等の困りごとは依然として存在しており、対面での接触機会の減少も併せて、地域活動者による課題の拾い上げが難しい状況が続いている。その中で、困っている当事者自らが相談をしやすいように、校区や地域ごとに身近な相談機関等の連絡先を記載したパンフレットを作成し、住民の手で地域へ広く配布することで、課題の早期発見、早期対応を目指す。

効果：地域や校区ごとに配布や掲示板への掲示等を行うことで、広い世代に渡り、改めて相談窓口を周知することが出来た。パンフレットの持参、説明をきっかけとして、気になる世帯への訪問を実現することが出来た。住民と専門職が連携した訪問により、地域の課題や状況を把握することが出来た。



●工夫したこと・力を入れたこと

- ・地域や校区ごとに、市全体の相談窓口でなく、生活圈域内の身近な相談先に特化したパンフレットを作成することが出来た。
- ・作成にあたり、住民と相談機関が意見交換を行うことで、地域の相談窓口として、校区社会福祉協議会ボランティアや民生委員児童委員、自治会等も地域の大切な相談窓口であることの再認識をすることが出来た。
- ・専門職が課題が多いと考える地域にもパンフレットを届ける機会に、状況把握をすることが出来た。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・今は困っていないなくても、何かあった時に、このパンフレットを役立ててもらえたらと思う。
- ・パンフレットを渡す機会に、地域の活動等を紹介することが出来た。
- ・地域の関係機関の役員やボランティア等の交代もある中で、自分達も大切な地域の相談先の一つであることの認識を今後も継続させることが出来ると期待する。



ご近所オンラインサポート事業

社会福祉協議会名：箕面市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：箕面市内に在住する市民（主に高齢者等、見守りの必要なかた）
および、ICT機器の使用に不安のある市民

参加（予定）人数：125人

目的：・対面でのつながりが希薄化する中、オンラインを活用して活動者や対象者のつながりが生まれるよう支援する。

・オンライン環境のない情報弱者の支援など

内容：・ICT機器（タブレット・Wi-Fiルータ）を市内14校区へ配備、各校区で活用する。

・令和3年度に実施した「見守りオンラインプラットフォーム事業」によりICT機器が定着した拠点において、会議やイベントでの利用だけでなく、各校区の高齢者を主な対象としてICT機器の使い方教室を開催し、ICT機器の利用者数を増やした。

事例：豊川北小校区 スマホ教室（一部Wi-Fiルータ使用）
：東小校区 お茶の間えみい（一部Wi-Fiルータ使用）

・公式LINEアカウントでの情報発信や、研修会での利用など、各校区の取り組みの中でICT機器を利用した。
（豊川南小校区・豊川北小校区・東小校区）



●工夫したこと・力を入れたこと

- ・無理なオンライン化をせず、対面での併用から始め、定期開催の会議等での活用から用途を広げるようにした。
- ・ICT機器について興味のあるようなキーマンや取り組みのアイデアをもつかたを校区内で見つけ、そのかたを中心に導入支援を行った。
- ・「ICT機器は便利なものである」と認識してもらえるよう、適宜社協地区担当職員が機器使用のフォローを行った。
- ・事業終了後もICT機器の活用を希望する校区には、社協地区担当職員が機器の契約内容の説明や手続きの支援を行い、インターネット利用ができない期間を生じないようにフォローした。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・「この事業が終わってもなくてはならないもの。機器を自前で契約をして今後も地域活動に活用したい」
- ・「使い方に慣れた人が、また別の人に使い方を教えて広がってほしいと思う」

「つながれオンライン Area 続かしわ life」

社会福祉協議会名：柏原市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：①自団体役員・自団体職員／スタッフ・自団体会員
②自団体以外のボランティア
③上記以外

参加（延べ）人数：4,000人

実施回数：①ICT関係講座 4回
②リモート行事 31回

内容：

①「ICTを活用できる人材育成」②「ICT・オンライン機器の活用」③「情報受信拠点機能の充実」の3つを重点目標とし、地域の中にリモートを受信できる拠点や人材を確保し、双方向のコミュニケーションを活かせるよう、研修会やガイドブックの作成、拠点の整備を実施した。

効果：

- ① ICT活用を目的とした講座の開催のほか、学生ボランティアに協力してもらうことで地域福祉団体との世代間交流、意欲向上につながった。
- ② ICT機器の取り扱いや貸し出し手順がわかるガイドブックを作成することでICT人材育成後のフォローアップを行うことが出来た。
- ③ 柏原市内全てのコミュニティ会館でリモートが出来るようになった。

●工夫したこと・力を入れたこと

3つの重点目標において、地域でよりICTを活用しやすくするため、ボランティア連絡会・学生ボランティア団体と連携しリモートサポートチームを設けた。受信拠点には地域の方々が出来る限り簡単に使えるよう操作性を重視した物品を購入して、拠点整備を行った。

受信環境の充実とともに、地域住民のフォローアップ体制を確立するため、地域で活躍している団体を対象にICT活用人材の養成で研修会の実施やガイドブックの作成を行った。

コロナが収束した後も継続して活用できる資源となるように工夫した。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

「リモート・ICTは苦手分野で避け続けていたが、今回の講座を受けて、地域の活動で試してみようと思った。」

「まだまだ課題は多いが、今後も活用できるように地域の人に活動や拠点のことをPRしていきたいと思えた。」

「広報活動としての活用が出来ると思いました。」

「ICTを身近に感じる事ができました。」



地域共生型ボッチャ普及推進事業

社会福祉協議会名：門真市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：ボッチャ体験に参加する市民（児童・生徒を含む）
優先調達に係る障がいをもつ当事者や障がい者支援機関
参加（延べ）人数：1241人
実施回数：学校でのボッチャ体験【9回】、ボッチャカップの開催【1回】
地域団体とのボッチャ体験【4回】、ボッチャの貸出【15回】
内容：障がい者スポーツのボッチャの普及を通じて、以下の3つの取組を行い、地域共生社会の実現を目指した。

- ①ボッチャ体験会等の開催
学校でのボッチャ体験の機会を創出し、福祉教育の推進を図る。
ボッチャカップを通じて市民に障がい者スポーツに参加してもらう。
多様な地域団体とのボッチャ体験の共催で連携を図る。
- ②ボッチャ機材の貸出による普及
- ③ボッチャのルールの普及と優先調達による啓発資材の作成

効果：ボッチャ体験を中心に約1200人の市民に参加をしてもらい、ボッチャの魅力を発信することができた。学校、地域団体、障がい者支援機関、障がい当事者、商業団体など、多様な団体が様々な場面で本事業に関わってもらうことができた。

●工夫したこと・力を入れたこと

本事業を通じて、学校へのアプローチや商業団体との連携など、福祉分野に限らず、幅の広い分野の機関との連携に努めた。また、当事者の社会参加や福祉教育の充実より地域共生社会の実現を目指した。



●参加者・地域の方たちからの感想やお声

ボッチャ体験に取り組んだ学校から、実施後にボッチャの貸し出しの依頼を受け、学校行事としてボッチャが普及していくという当初の狙いを叶えることができた。啓発グッズの作成に関わった多くの事業所からも、感染症の不安がなくなれば、当事者も一緒に参加できるボッチャカップの開催の打診を受けている。



中学校での取り組み



小学校での取り組み



啓発グッズ(授産製品)



ボッチャカップの様子



オリジナルマスク(授産製品)

スマホを簡単便利に～スマートフォン講座～

社会福祉協議会名：摂津市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：地域福祉に関わる方（校区福祉委員や当事者団体、つどい場スタッフ等）

参加人数：81人

内容：コロナ禍における高齢者向けの情報提供やつながりを目的として、スマホ等の利用方法を学ぶ。

講師として「NPO法人 健康・生きがい就労ラボ」の方々の協力を得て実施。事前に参加者のスマホの機種と利用状況（活用度チェック）を確認した上で、グルーピングを行い、講座当日は参加者が所有するスマホを実際に用いて基本的なスマホの使い方やアプリの取得、ラインの使用方法（スタンプ取得やグループ作成）などを学ぶとともに、**Google** レンズなど他に便利なツールを紹介・使用しながら、スマホの利便性や楽しみを感じる講座を行った。

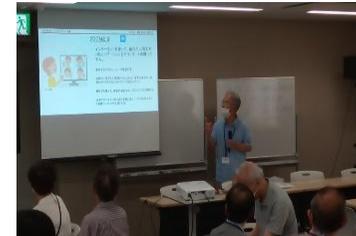
受講者が「ご近所スマホマイスター」（チューター）として地域にスマホの活用法、利便性を広め、伝える役割を担っていただくことを目的として、本年度からチューター養成講座も行った

●工夫したこと・力を入れたこと

参加される方がただ聞くだけの講座にならないように実際に操作をしてもらう。また各グループの参加者を4人程度にし、チューターが1～2名は付きサポートすることで、理解できないまま進行しないようにしている。スマホを操作することを怖がらずに、楽しんでもらえるように心掛けている。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ・前回の確認ができ、よく理解できた。使い方のわからない所を教えてもらいました。
- ・新しいことばが増え、楽しみ。
- ・すごく勉強になりました。楽しかったです。



ほっこりマフづくりプロジェクト

社会福祉協議会名：四條畷市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：市内小学生、ボランティア、朝日新聞厚生文化事業団
参加（延べ）人数：40名
実施回数：マフの周知1回（マフ製作33枚 配布30枚） 講座1回
内容：マフを使ってみたい施設やマフに興味がある方へマフをお渡しした。マフを作ってみたくて思っている人に材料を提供して作ってもらった。若い世代に認知症についての知識を深め、認知症にやさしい街を目指すため、「認知症フレンドリーキッズ講座」を開催した。

効果：認知症への理解を深めることができた。マフづくりを自宅で気軽にできるボランティア活動として取り組んでもらうことができた。認知症高齢者だけでなく障がいのあるお子さんにも使用すると落ち着く傾向にあるという効果が見られた。



●工夫したこと・力を入れたこと

マフの取組やマフの事を認知してもらえるチラシを作成し回覧することで、ボランティア・利用者ともに増えた。マフの使用感については、アンケートで回答してもらい確認できた。「認知症フレンドリーキッズ」については、VR体験を通して、認知症の世界を体験してもらう。「認知症マフの取組」で新聞に掲載されたことから全国から問い合わせがあった。お世話いただいた方からの感謝の言葉や感想をいただいた。市内はもとより各地から作ってみたいという声上がり、活動が広がった。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

これなら自分でも作れる。マフの手触りが癒される。認知症の事をもっと知りたいと思った。認知症はとても不便と思った。VR体験のような世界は怖いだらうな。普段体験できないようなことができて良かった。「マフ新聞」を作ってみてはどうかという声があった。（障がいのある）子供が気に入っているみたい。

「注文を間違える陽だまりオープンカフェ」（「つながり」「支え合い」「生きがい」事業）

社会福祉協議会名：四條畷市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：地域住民、地区福祉委員、民生委員、自治会役員、老人クラブ、ボランティア

参加（延べ）人数：36人

実施回数：講座1回、カフェ1回

内容：新たな担い手の発掘を目的とした「おいしいコーヒーの淹れ方講座」を開催した。前述の講座に参加された方に、「陽だまりのオープンカフェ」でカフェのマスター（マダム）として参加してもらうことで、習得したコーヒーの淹れ方を披露してもらうとともに、地域の活動に興味を持ってもらうことを目的とした。

効果：今まで関わりの少なかった若い世代や子育て中のお母さんの外国人の方の参加、数は少ないが男性の参加があった。

●工夫したこと・力を入れたこと

「地域のために」を前に出すのではなく、まずは「自分のために」であったり「自分があげたい人のために」やってみませんかというたい文句にすることで講座に参加しやすくした。地域でお店をしている人を講師として招くことで、親近感を感じてもらった。社協や福祉を知ってもらうきっかけとした。「ボランティアデビュー」であったり、習得した技術を披露する場としてもらった。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

地域のこのような活動に初めて参加した。楽しかった。地域の年代の違う人と交流ができて良かった。アットホームな感じが良かった。子どもを見てくださってありがたかった。全部が感激。



「なわてこども未来新聞」～身近な福祉を学ぼう～

社会福祉協議会名：四條畷市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：市内小中学生、教師、市教育委員会、地域住民

参加（延べ）人数：37人

実施回数：「福祉体験」1回、新聞発行1回（7,000部）

内容：「やってみよう！ふれあい福祉体験」の開催。「なわてこども未来新聞」の発行。

効果：「やってみよう！ふれあい福祉体験」では、子どもたちが体験を通じて、福祉に対して関心を持ってもらうことができた。「なわてこども未来新聞」は、市内小中学生に対して、福祉教育を推進した。また、今年度は地区にも回覧することで、地域で子どもを育てる土壌づくりを目指した。



●工夫したこと・力を入れたこと

車いす体験や点字の体験など複数の福祉体験を通じて「助け合い」「支え合い」の大切さを、子どもたちに学んでもらった。新聞は、学校で配布することで保護者も読むことを視野に入れて子どもたちが体験を通して「周囲に気づくことの大切さ」「他者への配慮」を新聞に盛り込んだ。若年層に福祉について考えるきっかけとなった。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

僕が高齢者になったらこんな風になるんだろうなと思った。自助具は工夫したら作れそうだなと思った。家や町にある点字を読んでみたいと思った。参加した子どもが点字器具を購入した。

オンライン会議・集いのための ICT 機器貸出・活用事業

社会福祉協議会名：四條畷市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：地区福祉委員、民生委員、自治会役員、ボランティア

参加（延べ）人数：214人

実施回数：「オンライン会議用周辺機器貸出事業」貸し出し件数は12件。

「スマホ教室サポートボランティア募集」1回。「LINEの使い方講座」開催2回。

内容：地域でICT機器の活用を促進するために必要な機器を貸し出す事業を令和3年度より継続して実施した。様々なツールを活用して情報を獲得するためのスマホ教室の実施及び、若い世代への地域活動参加促進と世代間交流を目的とした「スマホ教室サポートボランティア」募集を行った。

効果：貸出事業は貸出件数が令和3年度の2件から12件と大きく件数をあげるとともに、独自でインターネット環境の整備の検討や実際に実施する自治会が増えた。「スマホ教室」については、スマホの基本的な使い方を学びLINEの便利な使い方を知ること、スマホの活用の幅が広がり、ともに学ぶことで仲間意識が芽生えた。また、習得したことを他者に伝えてみようという前向きな意見も出た。「サポートボランティア募集」については、応募には至らなかったが、学校へ周知活動を行うことで今後の連携がしやすくなった。

●工夫したこと・力を入れたこと

「貸出事業」は事業の周知や活用の場の創出を行った。「スマホ教室」は、基本操作を学び、便利な使い方や便利機能の使い方を学ぶことで、スマホが単なる通信機器ではなく情報ツールの一つとしての認識を深めてもらうことに重点を置いた。参加者が教室で学んだことを他の人に伝えることで自信を持ってもらうことができるような働きかけを行った。「サポートボランティア募集」については、今までアプローチできていなかった地元の大学や専門学校へ働きかけ若い世代や学生の参加や福祉に興味を持ってもらうきっかけにもらうことや世代間交流を狙いとした。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

できることが楽しい。役立つ情報を知れてよかった。ほかの人に教えてあげようと思う。もっとこんな講座があれば参加したい。「福祉に興味のある学生がいる」（学校の先生）「（社協と）一緒に何かできたらいいな」



やる気スイッチ事業

社会福祉協議会名：四條畷市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：地域住民、四條畷の福祉活動に関心のある人、学生、職員

参加（延べ）人数：26人

実施回数：3回

内容：①「コミュニティコーピング体験会」の実施②四條畷市社会福祉協議会公式マスコットキャラクター募集・決定広報③四條畷市社会福祉協議会公式マスコットキャラクター缶バッジ製作

効果：①地域における高齢化にまつわる問題を解決するための地域へのアプローチ方法や視点の再認識につながった②応募を通して四條畷や福祉に興味関心のある住民が多いこと、四條畷市社協を知ってもらえる一つの機会になった③作業を手伝ってもらったことで社協や福祉に興味をもってもらった。



●工夫したこと・力を入れたこと

チームビルディングや共通認識を持つ場を作り地域課題の解決の手法とした。

社協だよりでの告知はもちろん、HPやTwitterで募集をした。

缶バッジを袋から取り出してもらえるように一緒に仕掛けを考えてもらった。（1枚1枚にメッセージを入れ、バッジを取り出さないと見えないようにした。ポジティブなメッセージをボランティアさんと一緒に選んだ）

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

①繋がり、ネットワークが大事。自分が頑張らなくても繋がりを活用すればいい事に気づいた。②応募、選考をしたことでワクワク感があった。素敵なキャラクターに決まって嬉しい。四條畷に役立ちたい

③春休みを利用して何かボランティア活動してみたいと思って応募した。

大阪府福祉基金地域福祉振興助成金 「ウィズコロナ、ポストコロナに対応した地域活動モデルの開発

「足力 up! 歩行手帳」の作製と配布、アプリを活用したイベントの開催（介護予防、閉じこもり予防、体力向上、生きがいづくり事業）

社会福祉協議会名：四條畷市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：地域住民、学生

参加（延べ）人数：手帳配布 198 人、ウォーキングイベント 68 人

実施回数：手帳の配布は通年、ウォーキングイベント 1 回

内容：「足力 up 歩行手帳」の発行、ウォーキングイベントのボランティア「微助っ人」募集、「なわてわくわく！探検ウォーキング」の開催

効果：手帳の発行やウォーキングイベントの開催は、介護予防や健康維持に努めてもらうきっかけづくりになった。地域交流や自分の住む地域の事を知ってもらうことができた。学生のイベントボランティア参加を通して、自分たちが通学している地域を知り、愛着を持ち、今後の地域活動に関心を持ってもらうきっかけになった。

●工夫したこと・力を入れたこと

参加者に「やる気セット」（手帳と水筒）を配布して、歩くきっかけと達成感を持ってもらった。ウォーキングイベントでは、歩くポイントにまつわる問題を作成して、楽しく歩いて地域の事を知ることができるようにした。ボランティア同士のつながりを作った。学生ボランティア募集のために市内の大学や専門学校を回り周知説明した。その際に学校側の課題なども聞き取ることができ、今後の連携強化につながった。広く市民に知ってもらうよう「社協だより」掲載はもちろん、Twitter や回覧板も活用した。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

手帳に記録することで歩くことが楽しみになった。ゴールを目指して歩くのが楽しい。イベントを来年も開催してほしい。問題がユニーク。楽しかった。四條畷の事を知ることができた。面白かった。実家が四国だから。目標目指して手帳を活用する。



ICT化による新たな地域のつながりづくり

社会福祉協議会名：社会福祉法人 大阪狭山市社会福祉協議会

●事業実績

対象者：地域住民（福祉委員含む）、ボランティア

参加人数：延べ 162 人

内容：

- 地域(地区福祉委員会含む)でICTを推進する人材育成を目的とした養成講座の開催**
コロナ禍でも人と人がつながりあえる新たな仕組みづくりを目的とした講座を開催、パソコンが得意なボランティアと本事業で実践を学んだ職員も講師となり、7月に「Zoomの使い方講座(初心者でも大丈夫! zoomの使い方講座)」を連続講座として3回開催、10月には会場を地域に移したLINE活用についての講座を開催、11月にはzoomとLINEを知る機会とした「オンラインでおしゃべりしてみよう」を2回実施した。各講座の参加については、地区福祉委員会役員会等へ地区担当者から説明を行いながら丁寧な呼びかけを行った。地域ではオンラインを取り入れた会議が根付いた所も出ており、対面では参加困難であった方々(働いている方や子育て世代等)が会議の場所や時間に捉われず、地域と繋がれている。
- 地域住民及び団体へのICT機器の貸出及び職員が端末を持参し講座を行う出前体験**
地域の集いの場であるサロン活動等に職員自らが講師となる出前体験を実施、貸出備品として揃えるタブレットとモバイルルータを使った、集いの場の新たなつながりづくりの活性化を図った。

●工夫したこと・力を入れたこと

本事業に携わった方が地域で実践頂けるように、また、学ばれたことを忘れないように、実践交流ミーティング「ならなれの集い」も併せて開催、習うより慣れろを合言葉に前年受講者も対象に含め、フォローアップを行った。

●今後に向けて

地域活動に参加される方々の手法の1つとしてオンラインを積極的に取り入れ、今後も1人でも多くの方に多様な参加機会の提供をしていきたい。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

【講座】

- 難しいが、楽しい。
- 地域でできるか不安だけど、披露したい。

【出前体験】

- タブレットでの脳トレ、これははまる。
- 次回のサロンでもタブレットを使った体操等をしたい。



「ツナガリ・ツナゲル・ツナギ合う」 農福・漁福連携プロジェクト

社会福祉協議会名：社会福祉法人 阪南市社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：①外出自粛障がい者・高齢者 ②活動に関心のある方
③福祉資金貸付事業相談者、自立相談支援事業相談者
④子ども、青年（障がい児、泉南学寮、子ども食堂参加者など）

参加人数：234人

内容：農福連携事業

1. 様々な世代の「参加の場」として野菜・果物の栽培
2. 生活にお困りの方や子ども食堂等への食糧支援
3. 寄附付き商品の開発（収穫した野菜・果物の地域循環）

漁福連携事業

1. 牡蠣小屋や観光漁業と連携した就労・就労準備支援
2. 観光清掃や海洋教育の手伝いといったボランティア活動
* 泉南学寮（少年院）との協働「温水シャワー設置プロジェクト」
3. 居場所への参加支援
* 認知症の方やその家族との釣りイベント
* 子どもから大人まで楽しめる地域食堂「ぎょぎょっこ食堂」

効果：

1. 農園活動・漁業活動が多くの方の外出のきっかけに繋がった。
2. 多様な主体同士の新たな繋がりが生まれた。
3. 引きこもりの方の就労や社会参加に繋がった。



●工夫したこと・カを入れたこと

- ①多様な主体を繋ぎ合うコーディネーターを配置することで、農福と漁福を繋ぎ合い、地域住民や専門職、事業所、企業等が一体となり、孤立防止や健康維持に繋がる活動を展開できた。
- ②生活に関する悩み相談に来られた方の、心の支援、繋がりづくり、就労に繋げる支援を多様な主体と協働し行った。
- ③ボランティアと一緒に寄附付き商品を開発し、売上げを赤い羽根共同募金へ寄付することで大阪府全体や阪南市の地域福祉活動を支える仕組みに繋がった。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

- ①久しぶりに農作業したけれどみんなとやると楽しいな。（男性・認知症あり）
- ②農園でのイベントは障がいのある子ども達のリフレッシュにもなった。
ぜひ来年も参加したいので声をかけてほしい。（放課後等デイサービス 職員）
- ③（漁福連携の）ボランティア楽しい！（不登校ぎみだった中学生）
→ 以降、中学校に通うきっかけになった。
- ④寄付は誰もができるボランティアの第一歩。寄附付き商品をぜひ阪南市で広げていこう。（ボランティアセンター運営委員）

ICTでつながる地域づくり

社会福祉協議会名：島本町社会福祉協議会

●事業実績（令和4年度）

対象者：住民、地区福祉委員、地区ボランティア

参加（延べ）人数：320人 実施回数：26回

内容：【スマホ】スマホ協力者向けの勉強会及び高齢者向けのスマホ教室を16回実施。さらに住民が気軽にスマホの使い方を聞ける場として喫茶店に協力いただき、スマホ協力者による『デジタルふれあいCafé』を開催した。予め内容と参加者が決まっている勉強会と、自分の都合がよい時間に立ち寄ってお茶をしながら疑問を解消できる『デジタルふれあいCafé』の開催で参加者の拡大をめざした。

【動画】コロナ禍で始めたYouTubeチャンネル『しまもと社協チャンネル』は、フレイル予防体操のほか、趣味やボランティア活動の発表の場として配信を継続している。そのため、動画編集のボランティアを望む声が多く、新たな活動者の獲得をめざして養成講座を実施した。

効果：スマホ教室は、途絶えていた「つながり」の場の再開と、コロナ禍で拍車がかかったICTツールの活用に対応できる場となった。また、スマホ教室や動画編集の協力者として幅広い年齢層のボランティアを得ることもできた。今回の事業実施は、福祉×ICTをテーマに、多様な世代が活躍し・地域活動に参画できる地域コミュニティ（スマホ支援や動画編集等のボランティアグループ）を立ち上げるきっかけとなった。

●工夫したこと・力を入れたこと

- ・スマホが苦手な高齢者に、基本操作から学べる場をつくり、「今知りたいこと」を確認しながら勉強会を開催した。また、今後も高齢者向けサロンでスマホ教室が開催できるように、スマホ協力者向け勉強会には、地区福祉委員や地区ボランティアに参加していただき、ちょっとした質問にも対応できるようスマホの基本動作マニュアルを配布した。
- ・養成講座の広報は、これまでの社協・町の広報紙のほか、町の公式LINEと社協ボランティアセンターLINEを活用し、広報紙を見ないであろう世代へのアプローチも試みた。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

「スマホの使い方が分からなくても、家族に遠慮して聞けなかったから、こういう学びの場に参加できて本当に良かった。」

「まだまだ知りたいことがある。今後も続けてほしい。」

「自分の特技やこれまで仕事で得た知識・技術を活かせる場が無いかと思っていた時に動画編集の養成講座の開催を知った。誰かの役に立てるなら、今後活動していけるのがとても楽しみだ。」



大阪府福祉基金地域福祉振興助成金 「ウイズコロナ、ポストコロナに対応した地域活動モデルの開発

安否確認（訪問活動）

社会福祉協議会名：能勢町社会福祉協議会

●事業実績

対象者：能勢町民

参加人数：11名

内容：

能勢町障がい施設連絡会、能勢町介護保険事業所連絡会、施設CSW、社会福祉協議会CSW、SCに協力をいただき、本町全域に訪問活動

①安否確認

②情報提供

●工夫したこと・力を入れたこと

新型コロナウイルス感染拡大防止対策。

独居高齢者への情報提供

脳トレプリント配布

社会福祉協議会事業説明

●今後に向けて

能勢町障がい施設連絡会等の団体へ協力強化依頼。

能勢町の情報提供。

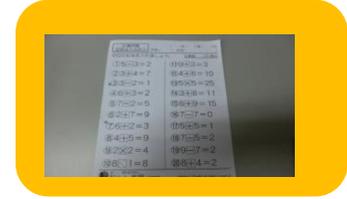
福祉サービスの情報提供強化。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

施設として協力でき嬉しかった。

脳トレプリントが楽しかった。

知らなかった福祉サービスがわかりよかった。



居場所確保

社会福祉協議会名：能勢町社会福祉協議会

●事業実績

対象者：能勢町民

参加人数：588名

内容：

- ・福祉施設に協力いただき、なごみサロン（居場所）開設。
 - ①日曜日午前中実施。
 - ②集いの場、おしゃべりの場。
- ・人材発掘（地域人材）により登録していただいた方による、小学生を対象としたスポーツ体験（ラグビー）。
 - ①小学校運動場でラグビー体験。
 - ②ラグビーの楽しさを伝える。
 - ③体幹トレーニング。
- ・人材発掘（施設職員兼ピアニスト）により登録していただいた方による、子供を対象としたピアノコンサート。
 - ①本人、作詞作曲の歌の披露
 - ②リクエスト曲演奏
 - ③子供達と合唱

●工夫したこと・力を入れたこと

新型コロナウイルス感染拡大防止対策。

●今後に向けて

PRの強化。
送迎問題。
会場でのイベント。

●参加者・地域の方たちからの感想やお声

プログラムがなく気軽に来場できる場所がいい。
コンサートを増やしてほしい。
この場に来るのが楽しい。



つな ぎ た い し 事 業

社会福祉協議会名：太子町社会福祉協議会

● 事業実績（令和4年度）

対象者：約 5500 人

参加（延べ）人数：333 人

実施回数：45 回

内容：

- ・ 町内の交流サロン 10 か所中 5 か所でスマホ講座を開催した。
- ・ 町内の交流サロンの紹介動画を作成。

効果：

住民のそれぞれに合わせた講座を開催することにより、操作技術の向上につながった。また、操作技術が向上したグループを講座補助のボランティアグループとして位置づけ、令和 5 年度から活動を開始することになった。

交流サロンの動画を作成し、町内の地域資源として地域住民や専門職に対して情報を発信する準備が整った。また、町内の関りがあまりなかった新たな企業とのつながりを創出することができた。

● 工夫したこと・力を入れたこと

- ・ 昨年度の取り組みから、ある程度スマホの操作技術が向上したグループに対しては、次の段階として他のスマホ講座で補助的な役割を担えるような働きかけを行った。これにより、新たなボランティアグループとしての活動につながった。また、このグループについては、令和 5 年度の活動を見越して、通常のスマホ講座の受講と講座で補助に行った際の情報共有の場としての活動を確保するための場を設けることとした。
- ・ 特徴的な動画になるように、各交流サロンの代表者にインタビュー形式の動画撮影を行った。今年度は町内の企業での撮影はできなかったが、令和 5 年度には交流サロンだけでなく、町内の企業での動画撮影を行い介護予防などの観点から紹介動画を作成していきたい。

● 参加者・地域の方たちからの感想やお声

「丁寧に教えてもらってよかった」「個別質問の時間があってよかった」などの意見があった一方で、「何を聞けばいいのかわからない」「テーマを決めた講座をしてほしい」などの声があった。



スマホ講座の様子



タイに出張中の講師と
リモートスマホ講座



動画撮影の様子



撮影した動画の
ワンシーン



撮影した動画を
地域資源マップに UP